慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	無意識を表す副詞の意味分析：日本語教育への応用を目的に
Sub Title	
Author	村上, 絢乃(Murakami, Ayano)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2013
Jtitle	日本語と日本語教育 No.41 (2013. 3) ,p.184- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-00000041-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』41：184（2013.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

無意識を表す副詞の意味分析
―日本語教育への応用を目的に―

村　上　絢　乃

日本語教育における語彙指導では、特に中級以降になると類義語の理解及びその指導が重要になる。類義語は意味が似ているからこそ、その使い分けを明確にすることは容易ではない。しかし、類義語の理解はさらなる表現・理解の向上に関わる重要な事項である。

そこで本論文では、日本語教育への応用を目的とし、副詞に分類され「無意識を表す」という点で共通する語を対象に意味分析を行った。中でも、様々な動詞と共起し、結果に対する評価的意味合いも関わる点で、混乱を招きやすく使い分けが困難であると考えられる「つい」「うっかり」「思わず」を取り上げた。分析は、意義素と共起表現両方の視点から行った。特に、「語の辞書的な意味」だけでなく「語の用法」を捉えることが重要とされている日本語教育において、共起関係から分析を進めることは有効であると考える。

先行研究や辞典の意味記述、コーパスによる用例の比較検討を行った結果、「つい」「うっかり」「思わず」のように意味特徴の重なりがある語は、それぞれの語の特徴的意味が強く出ない場合―例えば抑制力や後悔の有無が感じられない場合など―の使い分けが難しく、さらに詳細な説明が必要であることが確認できた。また、意義素と共起表現の両方から分析を行った結果、同じ動詞と共起している場合や同じ事実を見た例文であっても、副詞を使い分けることによって表現される意味に違いがあることも明らかとなった。したがって、学習者に提示する例文には、その副詞が用いられやすい典型的な例だけでなく、同じ動詞・場面でも副詞を入れ替えることで表される意味の違いも説明することが重要であると考える。しかし、共起する動詞によってはっきり区別することができず、抑制力や後悔の有無など心理的・内的側面も関わってくるため、分析作業は困難である。分析には客観性が求められるが、どの時点から抑制とするかなど明確な基準を設けることができない点でより一層の注意を払わなければならない。さらに、内容理解を助けるために日本の文化的背景も要素に含めるとなると、感覚的・主観的な部分も含まれるためにその分析・記述は容易ではない。しかし、今後この点についても研究を進めていくことは、日本語母語話者が見落としやすい語彙教育の問題点の意識化にも有効であるとともに、学習者に対して今まで以上に微妙な表現についての説明が可能になるものと考える。